特別
へ4
8103

讀百首和謌　　顯證寺法樂

春二十首

立春　　宗雅

まちえけりのしるしとけさは空に見えて浪をたゝまる松ならし峯

山霞　　道歡

佐保姫乃衣ほすらし乃山の端にかすみをかけておきはゆく

海霞　　性光

わたのはらなきさも波もみえわかて霞よりこそおきつれゆく舟

子日　　兼宣

あさみとり子のひの松をひく人のよはひはちよのすゑもかはらて

若菜　　篤尹

春きぬとみれは袖をはつかしくわかなつむらむかすかのの里人

〇〇文庫

朝鶯　　　　　　　持元

谷ゆかんまた夜をこめてなくなりあしたの原のうくひすの声

凍梅　　　　　　　堯孝

ひえの花にかゝる春風ふきにけりやとけぬ氷のしたにうつろふ

夜梅　　　　　　　雅永

かをしたふ夜はの月のうつりにもしらうめの花にうつるあかひかりにほふらん

岸柳　　　　　　　常永

あをやきのなきさのいとはひくあけはきしうつ浪もみとりなる色

春雨　　　　　　　益之

うちしめりはるのあめにふりいててさくらの花を色まさるらん

春月　　　　　　　満久

いまもなほかすみのそらにくもりそふかすむ夜の月

春曙　　　　　　　有光

かすみたつ山のはしらみゆくあけほのゝ花の色そふ空

帰雁　　　　　　　正徹

かへる雁くものうへにもかすみたちなをそかへるゆくゑしらすも

栽花　　　　　　　持之

ねさしそふ花のこゝろもひらくらし花はたゝよそにうつりゆくらん

翫花　　　　　　　公種

あかすみる木のもとのたもとにそ花の色ねもすかすみの夕はえ

惜花　　　　　　　雅清

ちる花をまたてふりぬる花の散をも風をのみこそなかむる

春駒

のとかなるすその川なかれきみさへなれゆく駒そいさむる

款冬　　　　　　　　　　　　　　　将頼

よし野河きしの山ふきの花の色は岸による波の花にそありける

紫藤　　　　　　　　　　　　　　尹賢

うへてみる水のみとりの紫の色もこきしきなみの池の藤なみ

暮春　　　　　　　　　　　　　　基親

帰るてふ春のあはれはいつとてもなつかしの空の暮そまたるゝ

夏十五首

首夏　　　　　　　　　　　　　　元昌

春ふかく咲し桜の木すゑのわかはなりかはる夏の初めかな

更衣　　　　　　　　　　　　　　直親

あらたむる衣の袖もうすくしてわかれし花の色そこひしき

卯花　　　　　　　　　　　　　　梵燈

山かつのかきねにしけく雪ならて暮にのこりてさける卯の花

郭公　　　　　　　　　　　　　　道歓

ひとこゑをまちしゆふへに郭公名のりてかへる声の程なさ

盧橘　　　　　　　　　　　　　　元保

ふりまされ軒のたち花ひきそて風のたよりもまちこそすれ

早苗　　　　　　　　　　　　　　益之

いまもこそすゝしき田井にとる早苗のはら露も袖ぬらしつゝ

沼菖　　　　　　　　　　　　　　重阿

さは沼のみくさにまかふあやめ草おもはぬ人もわかてひくは

梅雨　　　　　　　　　　　　　　常悦

和哥の浦に浪よせかけて五月雨は海のみなとにみかさましけん

夕立　　　　　　　　　　　　　　元久

吉見えし[illegible]の跡に[illegible]のくめぬ思ひの深き物かは

夏草　資誠

松山の[illegible]ゝ末の松かねの浪かけて[illegible]をかけて忍ふ夏草

夏月　[illegible]

流れ[illegible]涼しき波のゆふつゆをかけて思ふ夜半の影の月

瞿麦　為量

なひき[illegible]の小萩の外にさく[illegible]なでしこの花

氷室　為盛

あまつ[illegible]氷のつらゝ[illegible]夏の[illegible]

納涼　之重

木の間より入日のかけを[illegible]袖にすゝしき松の下風

夏祓　宗雅

ゆふ暮の風をまつより[illegible]玉のをせん

秋二十首

早秋　元俊

たもとにもしられぬ秋の朝風に衣手[illegible]秋の[illegible]

七夕　常建

かさゝきの橋のちきりを中[illegible]雲の[illegible]さの[illegible]

稲妻　尹賢

秋の田の[illegible]のむすふ露の[illegible]いなつま

籬萩　元徒

[illegible]の[illegible]ませの萩の[illegible]

野萩　雪信

名にしおふ[illegible]花[illegible]の野の秋萩

路薄　　之衛

ふけゆかは風にしくれもわか袖もひとつになれるをはなのせ

暁露　　惟光

これまても玉のをやとし松山の嵐もさむくありあけの月

蕣槿　　通益

なか〳〵に色はきえすもあさかほのはかなくもことのはなの露

葛風　　采雅

ほくもふ露ふきみたれあきは野に出て家の庭まてかへすなり

夕鹿　　道観

ゆふ浪の尾上の山の鹿の音もさそひてみえなりさすかにや

初雁　　有光

秋きりのそらにつれてやきぬらん今はなかれく雲の空

叢虫　　満久

露やふかきしけみの庭にさそはれてなく虫のこゑ庭の夜すから

清露　　正徹

ふかき海やみきはの色も露の程一木ならねはあきの夜すから

顔月　　持久

あきの夜の月ににくき光をみしもかな山端の月

湖月　　孝親

ひとの心の月の光ゆく月をしたふ志賀のうら風

関月　　定孝

あまのはすゑ関守るとはれそゆかりゆきて月をみる

濱菊　　玄種

ゆくへゆく君かよはひをなかき濱の菊をもみせのふみそめて

擣衣　持頼

あさ衣よの〳〵しのちはやけてゝまたひゝきぬるしら川や

黄葉　雅永

いつかはと露も時雨も大川の紅葉のまにいろしまさるも

暮秋　妙文

いのこれはなを月のあはれいくとせまで暮まへまし

冬十五首

初冬　益之

霜かれの花はの河の紫にあはれさそくく冬にかも

時雨　兼宣

たのみてす露ましの露ともなくてのませ松の木の間

落葉　基之

かはかぜもしからまつひまもなけれはそのはにくしのせ

枯野　為豊

そてまでも花の色は霜のしたに菊かれて名のみありて

寒蘆　持之

かつら川こほりのあしのほしくもたゆるなみ風さむくや

池氷　有る

あさかはにいはなみもきしにしき山の月をみかほさきこしく氷おりけり

千鳥　宗雅

思ひきしみやのたきの浪にたえかへりて千鳥なくあやの川せ

残月　雅清

はふもあやなくのこりにし月をこの有明の月にかくれり

網代　元久

いさすゝ川もやむすふ河なみの氷のうへもてるみちの氷に

寒月　道歓

ける夜は十湊けてこほる浪まさる浜月やみゆらん

庭雪　常永

雲井まてふりしく雪の白妙に名はつもれむかしの庭

炭竈　之重

たちのほる煙はうすみてすゝかせちかなるをのゝすみかまみゆ

埋火　信義

やすらはむよはのねさめの埋火をへてほのかにかゝふらぬる夜

佛名　常松

ことはへたちの名をそ三世の仏はきえもせん罪なふりはてなきまれ

歳暮　尹賢

和歌の浦とまりあまりや拾く年ふけるもとゝしかるかみ

恋十五首

初恋　貞密

みをしる君乃むかしもあらぬ木のなるやおもひかなしからむ

忍恋　持元

袖にちくなみちる袖にいて深きものゝふの人やとゝめ世て

聞恋　梵澄

志らぬことつきなききゝて風そきゝてうけすそのかつ袖に

見恋　元久

山のやまにもかはの中にりりそめみるあをせあて契りけむ

尋恋　高盛

我のみや駒の菜ら花ちらぬむしへまゆるさぬ志らすへなりとも

祈恋　　　　　　　　　　持之

年までもかけしみたらしのかひなくはなきなさへ身を恨はてまし

契恋　　　　　　　　　　雅清

浪こさぬ井くちもまもる神かけしはこの松山をかけてちかはん

待恋　　　　　　　　　　慈道

ちきりおきし夜はとはやもとくまてそらの月をなとかまちしか

逢恋　　　　　　　　　　惟光

うれしさに袖もしほりてすくはしゆめにもあらはれけりなと

別恋　　　　　　　　　　直親

さりともかくわけぬるかひもつれなき人のこころは恋しからん

顕恋　　　　　　　　　　重阿

もれ初し袖のなみたにしほるなみたにもかなしきことはあらはれにけり

稀恋　　　　　　　　　　満祐

めくりあふはいつとしもなくうき人の袖のなみたのかはくまもなし

絶恋　　　　　　　　　　基之

いはぬ花まちかたきそのちきりにし月日もとをくなりにけるかな

恨恋　　　　　　　　　　持頼

夕暮はそのかねことも身にしみて猶うらみても恋わたるかな

旧恋　　　　　　　　　　賢永

つらかれしいにしへもいまもかはりなきよのうきたひにおもふそなる

雑十五首

山家　　　　　　　　　　満祐

山の井のあさき心のすむ庵は人めまれにそいとゝわひしき

田里　　　　　　　　　　宗雅

とはゝなる花にならすふみて雲のかよひ路

閑居　元家

いまからの[illegible]ふかき松山にすみなれぬともなけきはしらん

離別　基親

おもひとしふかく行末遠けれは我はいく秋の月なかめん

海路　満久

西の海や神のまもりのまひろけきは舟路よさかる浪風もなし

羇宿　元高

打しける旅ねのまくら志りしらぬ袖はかなしや風

故郷　通盛

いろにふその名はかりやふるさとの昔にかはる志のふさは波

晩望　常永

舟けし浪しつかなる夕なきの入江のかたにかへる舟人

述懐　元昌

なに事にかゝる心をとめもせすすてはなくて人のあるかな

懐旧　有先

打山の露もとゝきぬ深き夜はすみそめし世のむかしをそしのふ

夜燈　元資

いすりひのかゝぬ光や秋もすゝし　独むかふるまとのともし火

蕭寺　公種

あくる鐘のをとのみそきく山に我ものみならなくおもひ入らん

竹籬　當尹

玉敷のにはもちよの数とのみ[illegible]よみねの松風

祝言　道歓

君と君に神となりてまもりけり世々の代かけて松ちる濃

應永廿一年十二月八日

讀三十首和新　同當座

霞知春色　道歡

時も代もゆたけき君か久かたの天もみちて霞たつ比

野外若菜　宗雅

立よらは若菜つむらむひとあらは先の雪まをつむるまし

梅花遠薫　持元

吹風はさそふの宿はとほけれと香はたつねきぬ梅の下かけ

海邊春月　雅清

和歌のうらはしほかせに舟もかすみかゝる磯の松の月

山華交松　持頼

よその山さくらに松の葉やまさるらむはなのさかりに

依花待人　持之

山路来る人ひとりなくそなかめ折花の袖のゆくと

山田苗代　堯孝

あけのころとそちる花を苗代のみなくちにてそむすふらむ

郭公数聲　元高

むらさめときゝて雲の一こゑをねさめの空にあかす哉

五月雨久　元俊

さみたれの日数へてふる雨にふる五月雨の比

河邊納涼　正徹

おく山やてる日のかけともる川の浪にそ秋のこゑもまさる

早涼知秋　善節

松かせはいはねの清水むすふてをかへぬ袖にもあき風そふく

織女契久　寶珠

あふ夜のあまの川代々やかれて契そおもふちきりをむすふらん

草花露滋　御製

しら露はちくさにしけき花ことにおきそふ秋の萩か花すり

明月紅葉　雅陸

紅葉するこの宮城野の秋の日もみえすもる月のかけかな

暁更惜月　林鳳

あかつきはあかぬ夜の月のなこりをしりてすむ山の端の月

擣衣聞風　之重

うちわふるあさのすさみのきぬたこゑや浦わの風のすゑにきこえん

對菊延齢　宗雅

ちく菊の開きふかくしこの葉にふかくて千世も延

初冬時雨　御製

かれのゝ草もしくれのふるさとの山もみしくれきく神無月

寝覚千鳥　道歓

ねさめするまくらのねのねさめしたちの千とりあかすなく向鏡

遠山雪深　宗雅

峰の雪日ことにつもりて白妙の嶺のたかねのふかきなりけり

契経年恋　元久

日を経てもいまはたのまぬ松の葉のちきりはかはらしとこそ思へ

依恋祈身　元継

むかしの人のあはれよりもおもしろいのちを神にいのるかな

寄歌晩恋　雅湛

今よりやかはらぬ契りを神にかけてたのみつつ[illegible]

遇不逢恋　資廉

結ばれて中々なかなかの[illegible]のおもひ[illegible]

披書恨恋　宗雅

思ひすまはけるもよろしくなき[illegible]のうらみにおもふ恨みわかれは

関路鶏　尭孝

あかつきのやみの[illegible]にせきの[illegible]

竹不改色　常建

[illegible]の[illegible]みどりの[illegible]やよをへて[illegible]

遠帆連波　寛寂

ゆくさきはおひてやまさき舟のあとは沖津白浪

眺望日暮　道観

おきつ[illegible]ても[illegible]晩鐘のこゑ

寄道祝言　宗雅

あまてらす神の[illegible]の[illegible]とてや神[illegible]らん

立春
あつさ弓おして春きぬまちえつゝ
はるゝ山よかすみをかひく　道歓

卯花
月よりも又白妙のうの花は
垣ねしさらぬの庭ぬかもうつ　之頼

郭公
夜半あまた声かれてほとゝきす
まつもうきかは川ひと声の空　尭孝

牧駒
夜はあれみつのまきにあまたあれは
つなくもちふるゆふ草　梵燈

新樹
おなしえもとみしにかはりけれ
ぬこる之花はわくの山里　梵燈

鳫似擣
鳴かつるまて衣うつものおとかして
とゝろかしつゝあまれ鶴月　梵燈

早苗
ゆきゝえにきのふ民のわさ田には
て庭もゆふさなへとるなり　信兼

萩破夢
かりまくら夢もたえぬるやうとかし
折搨の萩お風まさしかりり　信兼

絶恋
流れきあくる浅の淵の河とて
あふ事は今ゆる恋の中川　元瑳

子日
春の色まくいふみゆる松の枝々
いつの子の日のこゝろかはらん　益之

梅移袖
いつくとも梅はまたのみむめの色
袖ふうやて香をせそふく　益之

五月雨
雲かゝりてあふれハふるかくたえもなし
いつく杣山そ五月雨れの　益之

早稲

秋かせの吹かけ日よりおきそめて
はやわせのわさ田ハよるのまもかし　雅之

五月雨

わかれ行そらにはまたせそこぬらきも
なきそいまに庭のなり水　宝城

園葛

かへりても思はれ小田のわいなる
ひとつもうらむ作もれ下の露　宝珠

早苗

むすれやかも雨のふる雲のまの
山田のなかにとる早苗かな　正徹

郭公

まちえつる山ほとときす一声の
のちもなかれ夜のそら　正徹

夕立

ふきおろす風もはけしく山のはに
雲にさそふ川夕立の雨　正徹

寄琴恋

ゆくも恋とちきりしこともかれとの
こゆるをといひかけてそよのまん　正徹

春草

雪ハなほやきてもけりしめすふおさみともき
たる家よりこゆる雉鳴の若草　伊好

祝

あつきまちやとのいはほにかはらぬ行も清き
このまつはそかさまわのへき　伊好

萩露

庭もせの萩の花わかれおちつ露
かそこ家れのゆふはえかき　頓阿

沢鴫

ゆふ暮のあはれは小ゆうしまてと来
雲もかたもふねのせそよく　頓阿

時雨

一むらはなひく雲のかよひ風そ
さためなみえてし山を志らん　頓阿

郭公

待ことは雲のもとてれかしらふれ

うきねやねまのしらさめの空　多阿

野萩

露ともあくしらしやりはまし露の

玉ちよこれしあれ萩の空　多阿

路

吹かせかせてよしん松か浦や

立ちぬ波路の舟の行末　元昌

釈教

まよふをとおもふ心もしられけり

あけさとりのいそれあるへき　玄哉

草菴

消ぬまもあはれなるかなしら波哉

庵かよのしらぬ木のま山　玄哉

是しはいま拾ふあしきてあかくきれ

郭公

待かねの山の緑の影とあかすらん　元継

旅

なき跡も身にゝ添ふる私てかけまくも

みちしるへせよおのかあさかほ　河春

冬立

光をも雲ものこらぬ山おろしの

法りまよひの庭そつもらぬ　河春

歳暮

こゆるきの磯の池の波とともみつ

りくすつきな月しの露ら　河玄

草菴

急行はそちの関ふあらし孫もそ

日またにたゝさ柴の庵かれ　雪信

絶恋

いつきんまくへのちれ中くす

うらみ猶ぬれてなれりと　雪信

寄鐘恋

人ハさもおもひもいれぬいまさひとの

ありあふ夜をあふさまつらん　雪信

殘花
ちりとちる花はなほあはれの色消尚
木末清よかひかる山桜かな 忠和

水鶏
小夜更よそれはたゝくもあけよとて
たゝ見てゆく田のさとのくひなそ 忠和

萩
あはれまそふゆふやまの行すゑの
色ますれ小萩か花のうつろへる 忠之

暁
山里は尾のへのあやとりの音
とりおつる朝のなかれさされ 忠和

寄郷恋
思ひわひぬ袖そぬれしぬるかくは
けふのかそへのあま衣うら葉 忠之

寄河恋
いかにしてあふせの河のことつけ
なかれもやまぬ袖とぬれなん 忠之

時雨
風さそふ木の葉とみちのくを
そめてくさそひて時雨かな 之重

夕花
花にとふ人も月のゆふまくれ
かへりとなりにけりおもかけなき 歳一

女郎花
かみかへしかたみに色ふかひきても 有る
露ふかみなに色をしりそめて

寄風恋
人の心のうつりかはるらむいてや
それとも行さそひ行らん 守肱

寄松恋
色なやまぬまつのはの松のもと
ねさしかいかにとそ 忠和

寄神恋
神にいのるかひなきかはりさくらの
つれなき人をいのりかねつる 益之

寄松恋　めふよのかくていよもふし逢ひなり
いもかとしへの三輪の神杉　雅純

寄木恋　ふしき木のちはしるちてのいふやと
みるまくはしれいのちもか　え待

寄柳恋　久かたのそのまくそもいとし紅葉
雲かくれのおちの葉もかなひ

寄杖恋　いつとふにいまのあまそ終いゆふ根くひ
ちりもやそとへの杖ともかし　定孝

太千首の題にていつとなく横笛くまくこそ
ちりくくりかりて思へ玉篇おまたの乙けし
わかいかきとなる不もやてあれをそのまゝ
写とそのなり

崇徳院の御宮へ
勅額をかけさせられし時　飛鳥井宋雅
より當山に御寄せられし哥の写

頓證寺額ハ御法楽百首和哥ノ事　同
入道法親王御執筆次第は段ニ在
額中額章字ハ御敷御執
被染　宸筆は特別を　御奏ニ同
當時云々章は神変納文宝銀に添
法楽百首同箇所所々に清書事別
施奉を入ル　御製連歌一巻御奉納
ニ級ひ可御奉納候弥[illegible]
奉納の為ニ参候也恐ニ謹言

きうたう
菊川殿　　　　　　　　　　　　宗雅

富小路殿より當山院主への御消息
このたひ冬のかみわけられし三十日
萱堂の御手つからあそはされし御典を
ことにあらたなきよしにはひの御うつし
うたかひなからかしこまりしてのことく
まつ川幸和まてそはいふまてもなし
かしこき月を
此御事御法楽は登山

かくてハ神ノ[illegible]并ニ[illegible]もあり
仏間へ[illegible]きの箱ニ入候へハ
御製の御短冊より御名ありとし
よろしく別　御製あり此　御製をそへし
ふみまうでとの仰ありてなきまて
かしこく此ほとに成りて新しき御をみ
へこにして百首法楽とし当所をたて
一巻にあそはされ御短冊させてをくりし
又宝殿法楽し一日ニ千首此院の後之
ゆるしいつまでも箱に入てまつる
奉納ありてしきりにはや候もかへり
たてまつるへし

詠法華經序品和頌

入於深山　思惟佛道

浅よりもおくふかき山のおくふかくそおもひ入法の花ゆへ

家雅

懐舊

長月やのこりみし経のさまてたちかへり経の枕の袖そぬるゝ

詠法花經方便品和哥

権中納言　有光

まことをはうけてのこゝろも月をこそまことのかたも思ひあまれ

懐舊

思ひ出るむかしを今にかへしてもおもふせをしのふ心なりけり

持にしてや

侍へく侍

判

詠法華経譬喩品和歌　道歓

寂然閑居安處林野

明暮乃雲霧なるもしまて麓の寺の鐘の音ぞ

懐旧

法場に佛みちを時のゆかしさも昔の跡をしのびいはし

詠信解品和哥　前大僧正守轉

契ありし親にちかひしそのちかひ遠き長者の家ぞ今ぞ見る

懐旧

汲みて知る法のみなもと月も昔の影をしのびの

詠授記品和詩　正三位公種

あつけおしその光の法にしたがひてきみをあふぎしかな

懐旧

きのふけふいさ見て後おもへばなをかぎりなき世の昔かな

詠薬草喩品和歌　常永

おくすゑの草木ちるとも此世にはそそぐめぐみの山端の月

懐旧

おもひいでて袖にかかりし古の昔をしのぶへと見ぬ世のみぞ

詠化城喩品和哥　　正三位基親

なやまてかへりやぬる法のなかりせはと思ひこそゆけ

懐旧

ますますも心よりそのすゑめあるふるき世の夢のなりけれ

詠法華経五百弟子品和謌　　正三位長遠

ゆはのみこころのうちに雲をはらへはあらはれにける玉光之卿

懐旧

わすれしなうきよのあきをつきせていまさら袖の露やこほれむ

詠人記品和歌　　左中将公賢

きもちしにてありしもうきよ見てかはしやしくしや宅すみつらん

懐旧

夢と成むかしをかけてこひしさのなかにありしよもかなし

詠宝塔品和哥　　法印覚果

そのかみの花のちらぬもあとも似く先にあらはれしのこるものかは

懐旧

かくしつゝむかしのうれひとともにみてもかこちかほなる袖やぬれまさる

詠提婆品和歌　大僧都仲助

法の木となる山路に水くみはかゝる此身のかきりなき道

懐旧

身のむかしなすひまにそむかくれゆけはちきる法のみち[illegible]

詠勧持品和歌

我不愛身命但惜無上道　摂津[illegible]光[illegible]

あらましぬ我身はそれなき[illegible]月のみか法明なる

懐旧

いにしへのかりそめの世はいてよはりめくりあひしみて[illegible]

詠安楽行品和歌　正徹

あつらなる心のすくし中世の里の花月をさかへは

懐旧

昔世八にても[illegible]月影のひかりをともし[illegible]

詠涌出品和歌

従地而涌出

泥水といへともきよし蓮葉のにこりにしまぬ高ねの人を

懐旧

昔にて猶ありし和歌涌[illegible]

詠寿量品和歌　梵舩

あるゆきをはらつしはつるあけぬともわかれをおしむこゝろなりけり

懐斎

かゝるぬるおいのいのちはいふかしきたのむかきりはなきをまつらん

詠分別功徳品和歌

こゝろさへかひろふしるしそのかみの月をのちまてもみつ

懐斎

浅きをもあはれとおもふまことゆゑかのひとつあしもおもひは

詠二首和歌

随喜功徳品　嘉果

てらさるゝこゝろのかけもそのよゝにいかにかさけるへき

懐斎

かきかすこゝろのはたいりへふきかへすかせのおとこそ

秋日同詠二首和歌

法師功徳品

あのほとけのひきかへしてもひとつのこゝろをしるべなりけり

懐斎

今人の心ならぬ浅ましき月のかけをもしらなくに

詠法華経不軽品和歌　下野守益之

ひとりのみちきりし道の枝にわかるゝ人のはなかるらん

儀齋

いまさらにわけゆく枝もたちかへりまよふ道の末のひとりかな

詠法華経嘱累品和歌　沙弥寛融

法をのみ法にのこしはなれぬ縁とかたりつたへて品とほし

儀齋

いつへともなかくそ法の末ゆくかれはさためなきひとの世まて

詠神力品和歌　左衛門尉祐氏

如風於空中一切無障礙

雲はみなひかりにきえてあまねくはるかなる秋の夜の月

儀齋

いつまてもきえて絶せぬ世をかへん無我といやなみにかゝらん

秋日詠薬王品和歌

きし波のなかれのこよひまてらしのやみとこか月を法にまかせん

儀齋

まことにもよるしるしの松の音はゆめのゝかきるやみのうらうらん

詠妙音品和歌　沙弥常枢

あらはれし世に出る身は清月のかけへうつしてすみわたる心

儀鶴

わか身はよしなき法をきゝてたのむよのえにしそあやしき

妹日詠普門品和歌　出雲守橘之重

さしたのやふかきちかひの海なれはこゝろも色にちりもさらめや

儀鶴

わか身にもたのむ心をとめし世を照すなる光そふらん

詠陀羅尼品和哥　沙弥伴照

ゆるしてし一乃法乃この葉をすりあつめ十のおとを見なるらん

儀鶴

まもらるゝ人はめくみてゆるしなき法月日たかきの光あまねき

詠法華経厳王品和歌

さらち孫をみちひく法の道なれはあまれ行し大和ことの葉

儀鶴

父乃子をまもるとしなりぬれは長月の袖の時雨は干る間もなし

詠勧発品和歌

若槻師若衛賣女也　　　重河

かわ人のあらなき世もまみかへしわかれ玉ふかき心や

懐舊

わかの浦のなかれ絶せぬ言の葉のみちしるへともなりぬらん

冬日詣宗徳院御影堂同詠二首和歌 各置一字於句上

参議従三位藤原朝臣宗恭

菊

花は冬色をかへしぬ紫の菊の葉月そかはらぬ

懐舊

忘ぬ世をはかへりみてこそ心のみかなしみよなきぬれはなかりけん

冬日詣宗徳院御影堂同詠二首和歌 各置一字於句上

従四位下行武蔵守源朝臣頼之

菊

たねとりの花を秋のまてさきそふ花のくもりさとはみれ

懐舊

はかなきもむかしをしのふたのみかなしき夢の浦のことのはまてに

冬日陪 崇徳院御影堂同詠二首和哥 各冠一字於句上

散位従四位下源朝臣盛實

菊

きみをまつうつし菊の花の枝を玉はり月のしたそへそときそふ

懐舊

こゝろなかむかしをおもひいてゝしのふむかしをしのふやこのよをとりの春

詠二首和歌 各冠一字於句上

菊

まさるへの花やかなりしいろもともこゝろをうつすらんきくのはな

懐旧

あすか川むかしいまにかはりきてかはらぬものかはせのなかれ

冬日陪 崇徳院御影堂同詠二首和歌 各冠一字於句上

右馬助従五位上源朝臣頼基

菊

庭の面に植てたえぬをおれはもそのみさをいろかはり行

懐舊

葉かへせぬうれ松山にあとまりてあはれ代々もふりつ

冬日陪 崇徳院御影堂同詠二首和歌 各冠一字於句上

散位従四位上藤原朝臣基明

菊

きくえ於秋暮まれしえれ三つふまそうつふくとも荒やよ

懐舊

花やつれけり御代のむかしをしのひつゝいまたなのひつ

冬日陪　崇徳院御影堂同詠二首和歌　各並一字於句上

正六位上行権少外記伴朝臣周清

菊

露しもれつさなき紅はよさきそひてまかふかたへといはまもみえて

懐旧

きくからにむかしかたりおもかけにさそはれてしのはしこまかし

冬日陪　崇徳院御影堂同詠二首和歌　各並一字於句上

散位正五位下源朝臣兼能

菊

ゑらさ源やしもいろかはらむ菊のはなやにをりても冬かれて

懐旧

もとの人のよのふるきをしたひつゝなきみるとその花もおつかたれ　廿八

冬日陪　崇徳院御影堂同詠二首和歌　各並一字於句上

散位従四位上源朝臣有孝

菊

つきぬへきやむものまたかれ菊　そのかへしをかし

懐旧

みぬ世をしたふかしのは世のかくちらいしまにもあらくむかしを

詠三十首和歌　　　　　　　　　　沙弥行空

連峯霞

立渡る霞に雲は志ら峯のはいつまてか消えのこるらん

餘寒月

霜きえぬ春もあさ野の小笹原ゆふへそ月のかけ冴けり

谷帰鴈

花さかぬ里に帰るや雁かねの志ら雲分る谷のかけ行

深山花

いほりして小こゑの人家ぞなく山ふかみ花に心なくさん

落花雨

ちる花を雨にかすむ夕はまたも見ぬ月をこそ思ふかけなき

江上藤

藤波を見んとはこえわたす吹く風に入江の中にそたちし白波

暮春鶯

はるも今日暮れゆくをしたひてや鶯もなく聲ますらん

待郭公

なくきくは声をとりてこし橘のこころへそさへ葉かくれにけり

河五月雨

さみたれは雲の瀬しらく山川の水まさりきぬ流るる流れ

夕納涼

松か風声をかけ行の岩清水むすふ夕けの月の影さへ涼しさ

初秋衣

たちかへ秋にはなりぬあくまて夏衣袂もすゝしきかぬまゆき

故郷露

みとりなる鳥羽山松ハ君か世乃数ふ茂子にそつ緑く茂たれ

囲邊薄

いつまても穂に出ぬる露の上乃わかもすゝきやわき府や田かし

朝初雁

あつらへいまゝ旅なる朝霧乃中に紀見をそよる雁かね

流水月

月かれは行もとまらすうつりみつゝ見てもとゝめて影山川乃水

舩中月

良やまのぬ沖あくるる舟帆のうへとまつる月を永く浮き不けり

遠擣衣

きぬたうつ川里ハ遠くまたれて夜乃こゝろへ聞こえけるかな

暁落葉

吹風もかふそきとも紅葉ちりしく有明の月

濱千鳥

さよちとりなくもこゝろ乃ゆくゑまて汀よりなき濱風の声

古寺雪

ふる古乃まかきも雪ふかみ積るハ檀乃苔てうたえし仏の

僅見恋

あき風の吹なかりし玉すたれほのかにみしも面影かなひ

不及恋

たのめ海そてふかきふかふ海乃なみのねにもなひかけれ

恥身恋

よそにのみもみえしてはいかゝ思ひつゝ人の行さき思ひ知らす

待便恋

かき払ふともくすめかいかくそ袖の涙の浪の関守

欲絶恋

夏引の糸の長き契はなかなかに絶えてもつれぬ物にそありける

山家鳥

山ふかみしはしとて百千鳥声は都もはるかにそゆく

田家煙

わか宿の烟のすゑに立はなれ里のしるへの今もたえせぬ

旅懐旧

諸国のたひねのあとにたつねても越ける山の跡のおもかけ

偶述懐

わすれぬは君か恵のその世にもおもひそへても猶そのこる

夜釈教

よのなかの法をおもふてよはる夜のかねのこゑまても

崇徳院讃州に遷御の事かけまくも

かけまくも天の下をしろしめす万民に

いふはかりなく契をむすひの御心ましく

隠れて崇徳院のおほしに正道の

あらはれて御霊の御威光を常都に輝て奇瑞多く

新に地に神霊月に光て諸人

鷲歎常にあかめ君を崇め

敬信の徒して其志を申されし

倫道の中にも和歌を専として各

詠作一興を催し風情巧し哥とも
撰集ありこの則詠慰魂精也へとこ道
安穏也柿保之より壽永といふありて
只於作者平家一類所をもて
あまた化人鳴の浦にて沒しぬる
忽御冥驗信ても信し仰ても猶
可仰や殊更末世の諸て狗守護
なきを非業を犯しき冥罰を蒙りし
事前のめし此神徳を濁世の兩度ふ
可被示異驗事條第て迎出かし
茲小當家は皇家川院ぬ付きまゐ
混して他に依く亂逆の風を避て流

論しも逝ば辞別甲た他念を示諸て
於て三十首を綴て所祝捧所あくまつる
速て哀愍納受を奉希者也

詠三十首和歌　両吟

連峯霞　道前

たなひくつらなかゆいとゝやまもかさみてこゆる君志らゝみ

餘寒月　武麿

ふけゆく夜半は風にさえかへりて霜もなくむすふに清き月かけ

谷帰鴈　道前

一つらの翅ならへて立出る谷もみえけり雲のうへに帰る雁かね

深山花　武麿

たくふかき深山おろしを立こえて花にわか入人なかりけり

落花雨　道お

ふるさとの風すさもなをぬるゝ雨にさきて散りけり

江上藤　武麿

むらさきの色もうつして浪深き入江のきしにかゝる藤なみ

暮春鶯　道お

うらみてもなくねは志はしとゝめなん春てふひなき別路

待郭公　武麿

まつ人はいまそ待出きし郭公こゝの初音はいたくも夜の空

河五月雨　道お

陰うつす河の流も日をふるの五月雨に水まさりてのまさる瀬

夕納涼　武麿

日影さす松の下かけ立寄れはいつか月の涼しさそひて

初秋衣　道前

秋きぬも衣かりてとまたうすくしらぬ風を身にしむ

故郷露　武麿

ふえ竹のゆえをとふしもれははるゝ人なれ庭のはちす

園色遊　乃お

花もておもしろみてまつる人はおはゆきしれる越の空

朝初雁　武丸

秋まつひかんわたる空の一行はなのまにやこし天はわたる

流水月　道前

くもりなく影すみもしもと月よかなるきにおもしろし波

船中月　武麿

何かたへを見るめをよそ秋の夜月に棹さしてうかれつり舟

遠擣衣　道前

うちたえる里やいつくの月もかくれ[illegible]かなたにけさ[illegible]

暁落葉　武麿

有明の月もくもりに松みえてさらに散るふかきの色

濱千鳥　道前

はるくとまちかひも影くまく夕かれの濱へてしきりなく声

古寺雪　武麿

鳴りつるてかもしれ軒も白雪に音にもつくへるひの鐘

隠見恋　そお

うつしも姿をわすれてるとうゐふかのみなせし人のおもかけ

不及恋　武丸

くりかへしすゑのひとなき身はくれなぬ袖のもる巻

恥身恋　乃お

あまりしよしなかしの親にても[illegible]つきかさ

待便恋

たか家紀州の使か明石の海に舟を浮べて　道前

渋待恋
ほかにひく人も有けりわが中は流るゝにかよひける人を是　武磨

山家鳥
年ふるもおさまる松にかよひきつゝ哀也けり山彼の声　道前

田家烟
立つゝも田つらの里は秋過ぎにけふはかそへてはいひきさ　武丸

旅懐旧
立ちかへりのちにとふや都より我も見るらむすゝの浦に　道前

独述懐
みさきそあれはつの沼とあそれそれこそ大和なるも　武磨

夜萩散

西の方月の入らん明り見ゆ花法の空に残れる雲

むかし宝暦十三年八月廿六日に
崇徳天皇の六百廻忌御忌にあたりて
頓阿の尚宝法楽に和歌奉られしと
なりくて
桃園院帝御忌ありしかば家ら師と
ともに得ぬて心にまかせてえらし関白
植通家兼能のおいさ三十首あん和歌
をよせて頼而　媒子内大臣
道前次郎武丸両吟の和歌をとて
まつのにて頼藤にはゆ好拙まゝ此歌

ゆくして海山を越ゆる文をもて君か海八て
わしこの後無し
左大臣尚實敬書

奉納
崇徳院六百聖忌法楽和歌

子日
諸臣の子日乃小松ひきつれてくらふも
ちよをふむしれ君を千代ふ　基衡

山霞
さほ姫乃袖くれ野辺のかすみけや
うちそふくふかれ立ちわれ山もと　公雄

夜梅
吹よせれされふれもさし春乃よれ
無風なくちらくかのにほひめて　隆前

春曙
山のはに小花の梢にそらしみ
あけれ後の無き乃ほのかの長誠

待花
ふりしこほりよりまて雲乃
とほ山のもらい花待つ御心　栄長

惜花
色も香も風にさそひてそのつらさ
こゝろとも思ふ花ははかなし　實岳

暮春
けふは日数くれてかなきかとりの
なかりとおもふ春の別に　基衛

郭公
呼子鳥ひとはほとめつらしくいくこゑ
わかしく鳴音もやさしき夜　定興

夏月
よもすからひてすゝしきめくる月影
まつ川かゝる雲の月にかゝる　基名

夕立
ゆふたちとなりたる雲のはれはやくも消ゆく
ゆくさ降り夕立はれにけり　基貫

早秋
花とても川離れ草の露とぞしる
この頃に風にゆる秋の初風　基衛

萩風
咲ぬるも萩を吹きてきていくらし
萩の上葉をわたる秋風　為栄

初雁
きれはつく雁も雲井の一声の
わたりも鳴きわたる里のおとずれ　公雄

秋夕
身にしむ秋にもあらぬはかなき
秋風にいつかはそのかたみなり　尚資

野月
みし人の心の袖にかはる志るもかれ
露のわかれく月のさやけさ　實榮

江月
わたしこしまの入江の秋の夜
兎葉の波をてらす月影　為栄

菊露
さく花のなつにもゆきておくる露の
ひとしほも匂ひの菊　隆前

落葉

夜ても嵐おとまさりし庭にせよ
三きちの木のはにうきん 基名

千鳥

友千鳥なる磯てそ浦わかれ行や
ときさたしふくかせにちて 基貫

朝雪

あわつもても峰の山のこ雪れよし
山の朝はなり雪を吹 實岳

祈恋

あふとならぬちらそつきもかね祈川
うきにしかすとかけていのまて 宣豊

契恋

まつはてわりひもとてしかしと
あきつのちきりとへよわきの松 榮長

逢恋

いさまくれ待ちしらさといひのつき
別来後の中せをのを 定興

別恋

かこちておしかくおしむ雲れたし
なをそ行きさきさよの路 實徳

久恋

年月はとぎれなりひはぬわたとし
しってハ人のこはふつまとかき 實種

暁鶏

ゆくさおもとの声もいさく暁之
いまたと行なもやすらん 韶房

浦松

海みちみとお松吹く風さそひて
いくよせかあらけの木うるさ 基衡

寄竹

朝か久れちらへねそといくよか世を
ともさなれし我よの呉竹 韶房

述懐

いつつにまかそてみなきこつりと
のかれ多る歎くところさ 實業

神祇　宮[illegible]　尚實

石奉納

寶暦十年　權大納言基衡

四首　園大納言基衡卿
一首　三條西大納言實補卿
一首　東坊城前大納言長誠卿
二首　油小路中納言隆前卿
二首　清水谷中納言實榮卿

一首　芝山前中納言重豊卿
二首　今城左中将定興朝臣
二首　風早三位公雄卿
二首　武者小路三位實岳卿
二首　壬生三位基貫卿
二首　下冷泉左少将爲榮卿
二首　石山右衛督基名卿
二首　万里小路蔵人頭右大弁韶房朝臣
二首　堤勘解由次官榮長卿
二首　豊岡治部少輔尚資朝臣
一首　園池上野權介實德

已上十六箇人

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品　書寫一巻

崇德帝聖忌六百回之秋爲奉納

于奥

頓證寺蕭書一巻詠三十一首和詞

寶暦十三癸未年夏　民部卿藤原爲村上

右一巻爲奉納頓證寺附別當剛叶法印

謹請吊奠讀誦法施廻向之心願也

同年六月廿六日

敬白

于裏

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

そのえやはらた月乃ほころふあつむらもとゝこの竹乃えた
ゆるはぬ家々もあらいくあきをかけし竹よふのまつさ
まてゆくあきをとよなる月の末野の原にてとまる八
さし寒き雪の花乃を分つ田の面をを山に帰りて
え行月のから八しは北わたしそわた乃まれを過る花に見
なりかをさしてふ口月浦のらを向そ今の立ぬ代々を傳て
絶ぬ叶まれを任あって山いくをありつゝ雲の白嶺の雪す
む鬼かて八とし乃あまえにかゝろひてるくし花の声をききし
あれ小舟口すちゝひの海ひろき志ら浪よりさき緑よなるは
さすむ乃けちを見く蓮葉の露あくなたちりもらります
たゞ年月松をも千々の身とえてきとをすゝめのりおもふ八
行の海也夕ちかく紅の空も月の光をうつ浪のうへ見え月

あまるそみちひく門に流るゝこゝろをこめてまかふるむ
今りても理りしらとめ松山の山またけさしる君か恵の露ふ
こゝの葉そとら夢乃世の八くみさてさつふうつの花を咲き
せもたゆうさむるおふをむすびけく見しわらせし夢の世のなり
百年をあきいく久りかはねても道のまもりの理りしらそし
かゝる代を露の秋月乃かけやすら六ゝ名を百年の杖
をたすらぬあるかのすたぬ見りかを革のあそのそせてもるむ

みれを理りしらほしても　作のこたま造結
信政て よきまれはつかし　遺勅の御制式とりと
今よりえし 勝乃をとゝまさい剣を身の
つたなふ口はかなし　金むろ乃またからた

いとゝ悲哀の情とこしへ懐舊の袖を
ゆふ斯の道かしく傳る之家の業ひさしく
傳くもの追慕したてまつるこゝろに
かんはしみくるゆへ申す

冷泉家嫡正統末孫

爲村上